

【研究ノート】

通 県 の 神 童

——劉紹棠の青少年時代——

名 和 又 介

はじめに

本稿は「北運河の寵児——劉紹棠の幼少年時代——」の後を受けて、劉紹棠の青少年時代、とりわけ中学時代に焦点を当てて整理したものである。中国の初級中学は日本の中学に、高級中学は高校にあたる。劉紹棠は校内の宿舎に住んでいたため、学校生活の紹介をすれば、それは劉紹棠の生活の大部分を説明したことになるとと思われる。一章では初級中学時代を、二章では編集・創作練習生時代を、三章では高級中学時代を紹介する。

資料として用いたものは四冊のエッセイ集（『郷土と創作』『私と郷土文学』『農民の子の創作人生』『私の創作生涯⁽¹⁾』）である。本文で特に断っていない限りはこのエッセイ集からの引用である。その他に在外研究の機会を利用して北京二中、潞河中学を訪問し、いただいた資料に「北京二中校慶紀念冊」（1990年4月1日）と「1867—1987 潞河中学紀念冊」（1988年1月）がある。中学の概観はこれらの資料による。又、通県県誌編纂室を訪問し、担当者から『通州文史』四冊をいただいた。潞河中学は三度訪問したが、1989年11月20日は陶玉森校長、王昶副校長から、二時間にわたり、劉紹棠の在校時代の話をつたうことができた。この場を借りて感謝の意を表したい。

1. 初級中学生のころ

(1) 北京二中のこと

1948年9月、劉紹棠は北平市市立第二中学校（現在の北京二中、以下、

二中と略す)へ入った。⁽²⁾二中は名門中学で創立は1910(宣統2)年に遡る。以下、二中の歴史を概観してみる。創立当初は、左翼八旗子弟学堂と称し、危殆に瀕した清朝を回復すべく八旗の子弟を統治者として養成するために創られた学校で、類似のものに八旗高等学堂(現在の北京一中)と右翼八旗子弟学堂(現在の北京三中)がある。辛亥革命後、京師公立第二中学堂と改称し公立学校として再出発したが、教師達は京師優級師範学堂(現在の北京師範大学)の卒業生で、学校は高いレベルを誇っていた。教育経費や教学設備の面では教会学校や私立学校とは比較にならなかったものの、学費が安く、掛かりは少なかったので、苦学生が多く集まったという。当時の北京の公立中学校は一中、二中、三中、京兆高等学校等で、教会学校には淮文、潞河、育英、貝滿、崇実、崇慈等が、私立学校には、畿附、求实、陶化等の諸学校があった。二中は1928年に北平市立第二中学校と改称し、1937年に北京市第二中学と改められた。その間、1936年に史家胡同から現在地の内務部街(元、段祺瑞政府内務部公署の所在地)へ移っている。

1948年夏、初級中学部の入試には5000名を超える応募があった。⁽⁴⁾募集は三クラス分150名前後の難関である。入試科目は、国語・算術・常識の三科目で、各百点の三百点満点となる。劉紹棠は三科目とも満点を取り、首席で入学した。二中の慣例で、校長・主任は首席入学者に接見し、彼の要望を聞き入れることになっていた。劉紹棠はその時、学内の寄宿舎に住むことのみ許可を求め、自分のベッドさえ通州まで取りに戻ったという。劉紹棠は首席入学者でありながら、二中の慣例を利用することも知らない田舎出の少年だったという。⁽⁵⁾

劉紹棠の在校時期は、解放前後の時期に重なり、中国全体が大きく変化しようとしていた。人民解放軍は北京・天津を包囲し、通県が解放されたのは'48年12月13日、天津が解放されたのは'49年1月15日、北京が平和裏に解放されたのは1月31日のことである。二中では、'48年、物価高騰に伴う教職員の賃上げストライキがあり、劉紹棠が受験した夏は国民党の抑圧が激しく、進歩的学生の解放区への逃避や放校処分が相次いだ。'49年に

なると党支部組織の成立と北京武装解放のための糾察隊も組織された。二中は4月1日に北京市軍事管制委員会⁽⁶⁾に接收され、新たな出発をすることになる。この間、劉紹棠は通県の家族と連絡できず、奨学金も遅配に遅配を重ねたので、新聞売りをして急場を凌いだ。彼は、新聞販売店の保証金として級友から5元借り、毎朝3時半に内務部街付近の灯市口東口で新聞を仕入れ、東城区、西城区を駆け回り、7時半に学校へ戻った。当時の新聞は8時までに売らなければ買い手がつかなくなったという。最初は120部しか売れなかったが、後になると350部まで伸び、日曜日には雑誌も2種類(『新聞天地』と『新聞内幕』)販売していた。劉紹棠はどの新聞も1部残しておき、学校に持ち帰って読んだという。幼少時も菓子を買うお金で包装用の新聞紙を買っていたわけで、劉紹棠の新聞好き、活字好きも相当なものである。劉紹棠は新聞売りとして当時の新聞には詳しく、新聞に載った作家や作品も目にしている。解放後は各種の新聞に自分の小説を投稿し、掲載されるようになる。北京が平和裏に解放され二中が接收されるまでの間は授業がなく、学生の自主管理に任されていたが、劉紹棠は読書三昧の日を過ごしていた。

「毎日私は窩頭を持ち、それから5銭で落花生を買って王府井大街北口西の三聯書店に行き、そこで一日を過ごし、夕食は学校へ戻って食べた。その他、南口東の元新華書店、東安市場の露店の本屋、これらは私が毎日通った教室だった。だから二、三カ月で、私は中国人民文芸叢書のような解放区の商品はほとんど目にした。当時書店はすべて開架式で自由に読めたので、私は小説だけでなく、たくさんの歴史書も読んだ。」(「開始了第二個青年時代」)

「私は胡適、周作人等、北京派文人の作品を読み、《御香縹緲録》の類の雑書も読んだ。忘れがたいのは露店の古本屋で『新青年』を読み終えたことだ。」(「我和書」)

読書好きは劉紹棠のみでなく、二中の学生の特徴でもあったようである。1950年夏、高級中学に入学した舒乙は次のように回想している。

「二中の学生は課外の読み物が好きだった。放課後書店に出入りしたり、映画館にもぐり込むのは我々の必修科だった。《四十一番目》は王府井の新華書店で読んだことを今なお覚えている。当時、書店の店員は別に我々を嫌っているようではなく、立ち疲れて地べたに座っても、上半身を本棚にもたせかけても一向気にするふうでもなかった。』（「好好地玩——那也是好伝統」）

図書館の劉先生の指導も劉紹棠に多少の影響を与えている。劉先生は単に本の貸し出しをするだけでなく、劉紹棠を初めとする向学心の強い学生に名著を薦めたり、新着図書を貸したりしており、とりわけ劉紹棠を優遇し、よくおしゃべりをしたり、読書指導をしていたという。劉紹棠も図書館や劉先生の宿舎に出入りして《叙頭鳳》や《清宮秘史》に没頭し、半日を過ごすこともあった。

解放前後の二中は、劉紹棠以外にも多数の文学者を送り出している。劉紹棠と同期の文学者に王黙風⁽⁷⁾（河北省の作家、《踏莎行》が代表作で石家荘市文聯主席）、李洪洲（劇本《一盤没有下完的棋》の作者）、張天民⁽⁸⁾（劇本《創業》の作者）がおり、一期上に從維熙、韓少華⁽⁹⁾（二中の国文教師でもあった）がおり、三期上に黄悌⁽¹⁰⁾（話劇劇本《鋼鉄運輸線》の作者）がおり、舒乙は劉紹棠より二期上である。韓少華は当時の二中を、勉学意欲とりわけ文学的雰囲気⁽⁹⁾に富む学校であったと回想している。濃厚な文学的雰囲気の中で多数の文学者が生まれたというわけだが、その雰囲気を作り出したものは、解放前後の緊張した時代背景と二中の優秀なスタッフ、切磋琢磨する学生に求めなければならない。先に優秀なスタッフ、二中の教師達に触れておこう。

(2) 二 中 の 教 師 達

劇作家の焦菊隠は1928年から1930年まで二中の校長を務め、解放前後は国文の教師でもあった。⁽¹¹⁾ 二中を卒業して十数年母校の国文教師を勤めた韓少華の回想を引用してみよう。

「当時の国文教師達は学者であり、業績もあった。例えば宋藩之先生は文字学の、王錫藩先生は詩詞の、龐道誠先生は八大家散文の権威だった。とりわけ触れないわけにいかないのは潘遜皋先生で、十三経に通じ視野は広く、英語の基礎もおありで中西の学問を重視しておいででした。脂硯齋批評の《紅樓夢》から林紓訳の《巴黎茶花女遺事》まで、我々は先生の授業中や課外の懇切丁寧な指導で目の覚めるような警句をいただいた。」（「学習気雰及其他」）

潘遜皋については、劉紹棠も「老師領進門」で詳しく紹介している。潘先生は白洋淀（北京南方の湖）の出身で、三十年代に北京大学国文系を卒業し、清末の翰林潘齡皋の弟にあたる古典文学の学者だった。古びた藍色の長衫（単衣の長い服）を身にまとい、背は低く、度の強い眼鏡をかけていて、髪は少なくなっていた。潘先生は授業の度毎に級長の劉紹棠に質問し、彼が答える時は眼鏡の奥で目を細めて微笑んでいたという。先生は、古文の授業では、生き生きと、興味津々と、酔うが如く文章に描かれた世界に没入していた。劉紹棠が教卓の下で先生のまねをして小さな声で暗唱すると、「そうだよ！ 古文を学ぶには、多く読み多く発音しなければいかん。」と励ましてもくれた。古文や詩詞を大声で朗読する劉紹棠の習慣は潘先生の影響だという。潘先生は校内の小部屋に住んでいた。近くの宿舎にいた劉紹棠は、8時40分から9時までの自由時間は潘先生と雑談をして過ごすことが多かった。彼は潘遜皋について次のように回想している。

「十中八九、潘先生はベッドの端に座り、両足は金だらいいにつけて、

両手で本を持って読んでいた。私が部屋に入ると、潘先生は足を抜き、ビショビショに両足をぬらしたまま、小テーブルの魔法瓶から私に白湯を注いでくれ、それから又ベッドに戻り、足を金だらいに入れて、私と話をした。何も知らない私は、次から次へとたくさんの馬鹿げた質問をした。李白の詩と杜甫の詩はどちらがよいか、韓愈の文と柳宗元の文はどちらがよいか、蘇洵、蘇軾、蘇轍父子は誰が一番よいか等のような。潘先生は涙が出るほど笑い、私に本を調べさせて、李、杜、韓、柳、三蘇詩文の特徴を説明してくれた。これは古文の学習で私をえこひいきしたようなもので、私には有難かった。」

作文の授業で、劉紹棠は高級小学時代と同じ要望即ち自由題を持ち出した。潘先生は難色を示しながらも許可してくれたが、しかし、自由題は減点するという条件付きであった。劉紹棠は点数にこだわることなく自由題を選び、小説を書いて提出した。返された作文は減点されることもなく、高得点であった。しかも、講評の際、潘先生はクラス全員に古文を吟誦するように劉紹棠の小説を読み上げて、激賞したという。劉紹棠は天にも昇る気持ちであったろうと思われる。再び、舒乙の引用をすると、

「二中の学生は多数が作文好きだった。当時二中の学生は作文の授業を競争とみなし、非常に重視し、大真面目に取り組んだ。(中略)授業中、先生に自分の作品を朗読されることは、入選者にとってはこの上もない光栄と誇りであった。私達は全員競って入選しようとした。当時私達は、以前の“秀才”の気分もおそらくこのようなものだろうと思った。“秀才”になれば——自分の作品が先生に朗読されたら——一週間は得意満面でいられた。」

高得点をもたらした劉紹棠の小説は《高粱地中》とか《合家觀》とかの題目で、劉紹棠の故郷北運河辺りの農村や昔話の類を描いたものであったよ

うだが、町に住む教師や学生にとっては珍しく、又、魅力に富んでいたと⁽¹²⁾いう。

「老師領進門」にはクラス担任の胡澤生も紹介されている。胡先生は数学教師で保定の出身。保定の育徳中学を経て北京大学の数学系で学んだ。1919年の五四運動に参加し、曹汝霖宅に火を放ち、章宗祥を痛打した勇士の一人という。しかし、胡先生は当時を回顧して、熱い血が騒いだけで革命思想等はなく、激しい怒りを発散させてからは、東安市場の露店で2杯の豆腐腦兒（豆乳を固めたもの）を食べて帰校し授業を受けた、と劉紹棠に語った。胡先生は北京中学界の数学三傑の一人で、幾何の三角形に秀⁽¹³⁾でていたので、胡三角とあだなされた。

「毎日夜の自習時間には慌ただしく宿題をやり終え、机の上で小説を書いたが、これは校則違反だった。胡先生の家は、学校と幾筋か離れているだけなので、毎日、学生が夜の自習をし終えて就寝するまで、先生は帰宅しなかった。胡先生は教室を見回り、私が小説を書いているのを目にしても邪魔しないのみか、そっと私の後ろに立って体を傾けてじっと見、私の姿勢を矯正するだけだった。『目は紙からもっと離して。そうしないと近視になるよ』という具合に。」

胡先生は劉紹棠が二中を離れて一年後に逝去した。首席入学の劉紹棠は、潘先生や胡先生に目をかけてもらいながら、小説創作の自由を大幅に認めてもらい、十二分に自分の才能を伸ばしたように思われる。

(3) 二中のグループ活動

次に、切磋琢磨する学生を見よう。解放前後は二中で多彩なグループ活動が繰り広げられていた。⁽¹⁴⁾壁新聞は各学年各クラスが競い、内容も詩歌、散文、講談、小説から種々様々の凶案文字、凶画の類まであり、学生が自分で書いたり、写したり、画いたりしたものである。二中の壁新聞は、黒

板に作品を書く形態のものであったようだ。劉紹棠は活動家のクラスメート陳万魁と相談して、中一甲クラスで文学サークル「雄鷄」社をつくり、上級生のサークルに挑戦した。同社の部長になった陳万魁は戯曲が好きで、諷刺物を載せ、副部長の劉紹棠は同社の大黒柱で、小説を書いた。陳万魁は、毎日、部員に壁新聞の前で見張らせ、「雄鷄」を見にきた人数、「雄鷄」で人気のある作品、他の壁新聞との人気度等の統計をとらせたという。その結果を部員に報告し、激励した。「今日『雄鷄』を見にきたのは三十数人。劉紹棠の小説が一番の人気だ。今後は小説を少し増やそう。」

壁新聞どうしの競争と、潘先生が授業中何度も劉紹棠の小説を朗読したことから、甲クラスでは小説ブームとなり、壁新聞「雄鷄」に掲載される小説が増え、徐々に中一クラスの壁新聞が上級生の壁新聞を圧倒し始めた。そうになると、中一の乙クラス・丙クラスも自分達のサークルと壁新聞を作り、甲クラスに対抗するようになった。そこで人気を集めた学生が前述した王黙風と李洪洲であった。二中の生み出した文学者で、劉紹棠と同期の二人は壁新聞で覇を争ったライバルだったのである。劉紹棠は壁新聞以外にも《光明》という手書き雑誌を出し、中篇小説を連載していたという。

文学サークルの主要メンバーは、解放後、北京大衆文芸創作研究会⁽¹⁵⁾（北京市文聯の前身）の会員となり、これの主催する⁽¹⁶⁾ 业余文学芸術学校文学系で学習した。北京大衆文芸創作研究会の会長は老舍、副会長は趙樹理で、业余文学芸術学校の校長は老舍、教務主任は端木蕻良であった。老舍、羅常培、何其芳、趙樹理、周立波等が講師となり、劉紹棠も彼等の講義を聞いた。何其芳の講義は劉紹棠の書いたエッセイで数回取り上げられている。それは《紅樓夢》の言葉を引用して、人物の会話の簡潔さを語ったもので、登場人物は各人毎回平均5句を語り、1句が7字程度というものである。以降、この目安が劉紹棠の小説の会話の規範となってゆく。

二中は1949年4月1日に軍事管制委員会に接收された。政府に接收された最初の中学であり、北京市で一番早く教学秩序の安定した中学でもあった。⁽¹⁷⁾ 以後、二中は模範中学校の道を歩んだようである。教学面での体制と

して、語文（国文）、数学、物理、化学、生物、史政、地理、ロシア語、体育等の九教研組（教育・研究グループ）ができた。現在は、史政が歴史と政治に分かれ、ロシア語が外国語（ロシア語、英語、フランス語）に、体育が音楽、体育、美術に変わっている。それぞれの教研組は、毎学期、教員相互の授業参観を数回義務付けられ、教師の資質向上に努めた。又、学生の政治思想教育も重視され、指導幹部は全員兼担し、政治の授業は全て担当したという。同時に思想教育を強化するため、許立群や峻青等⁽¹⁸⁾の文化人を招いて報告会を催した。さらに、新民主主義青年団や少年先鋒隊への参加、とりわけ学生の中から党员を育てる諸活動を通じて、学生達に進歩と向上を促したという。毎日早朝学生達に時事ニュースを聞かせ、高級中学生には何らかの社会活動をするよう求めた。二中大事記は、1949年の後半年に呉晗副市长（文教担当）の視察があったこと、1950年の建国記念日のパレードで「北京二中万歳！」「北京二中の教職員・学生諸君万歳！」という毛主席のお声がかかったことを伝えている。劉紹棠は1949年新民主主義青年団（1957年以降共産主義青年団）への参加を求めたが、区委員会レベルで、年齢が低いとの理由で（当時13歳）認められず、少年先鋒隊員になった。同時に軍幹部学校への参加も求めたが、同じ理由で認められていない⁽¹⁹⁾。政治思想教育の高まりの中で、劉紹棠も競って模範学生となり、入団、入党を願ったのであろう。

(4) 二中時代の創作

解放後、学校当局は文学好きの学生を集め、学生自治会通信班を組織し、新聞に投稿させた。新民報や世界日報⁽²⁰⁾の副刊に二中の高級中学生の作品（校内生活の紹介や学校通信）が登載されるようになり、新聞好きの劉紹棠に投稿の意欲を湧かせたようである⁽²¹⁾。1949年10月、劉紹棠は小説を投稿し、北京青年報に登載された。学内生活の短い話をまとめた作品である。数か月の間に新民報と『河北文芸』に第二、第三の作品が発表された。3篇ともに夜の自習時間に書かれたもので、2篇はクラスメートを、1篇は内務

部街の靴職人を描いたものという。⁽²²⁾翌年は飛躍的に増えて12の短篇小説と3篇の散文が発表された。『河北文芸』に発表された《新式犁杖》は小説コンクールで三位になった。当時、新民報文芸副刊〔萌芽〕の編集長だった宴明は、劉紹棠の投稿作品について次のように回想している。

「私は農村を題材とした作品を一気に読み終え、自分の目が信じられないで独り言を言った。『中学二年生が書いたものだって？ 出来すぎてる！』私はもう一度読んだ。小説の構成、配置、言葉、人物形象の描写から、風景、対話の描写まで、ほとんど完璧である。私は小説の言葉に魅せられた。簡潔な短文は清新な息吹があり美感もある。散文のような文章は一段又一段と続き、まるで経験を積んだ作者のようである。私は興奮して副刊室の仲間に行った。『神童だ！神童を見つけ出したぞ！』」（「神童作家劉紹棠」 文匯報1989年10月26日）

宴明はこの文章の後の方で劉紹棠との初めての出会い——神童と呼ばれてはにかむ劉紹棠の姿——を描いているがここでは省く。

ここで劉紹棠の小説を見てみよう。初級中学時代の新聞に発表された作品は20篇前後であるが、今簡単に目にすることのできる作品は『青枝緑葉』（群集出版社 1984年）所収の4篇である。小説コンクールで三位になった《新式犁杖》も収められているので、この作品を取り上げてみる。2000字に満たない短篇で、三章からなる。

——運河沿いの村に腕のいい大工の子弟が住んでいて、親子のように親密だったが、親方は保守的、弟子は進歩的で新式の鋤を作ることから仲違いをしてしまう。ところが、弟子の作った鋤の方が飛ぶように売れ、親方は生活にも困るようになり、自分の態度を反省する。弟子は親方の窮状を知り、再び親方の元に戻り、仲直りをする。——

話は単純明快で、親方（旧時代の代表）対弟子（新時代の代表）と図式的ではある。しかし、親方はいかにも田舎大工の親方らしく、弟子は進取に富む若い弟子らしく描かれ、二人の会話でスピーディに話が進み小気味よい。封建的な徒弟制度への批判を伝統的な語り口の小説形式で描いた佳作といえよう。ただ多少難点を挙げるとすれば、封建的な徒弟制度が、弟子の鋤がよく売れるという経済的成功によって簡単にこわれてしまうという安易さが感じられるということになるだろうか。しかし、それも講談のよくとる解決法で、劉紹棠の批判意識を問題とするほどのことでもないのかも知れない。文章は宴明の引用の通り、簡潔という言葉がぴったりのように思われる。

新聞紙上に発表される作品が増えるとともに原稿料も増えてきた。1951年に新民報に発表された《蔡桂枝》は30元の原稿料になった。二中の食費は一カ月6元だから、30元は少ない金額ではない。劉紹棠は中学二年生で毎月家に15元の仕送りをするようになった⁽²³⁾。

2. 編集・創作練習生の頃

初級中学三年の後期を終えないで、劉紹棠は河北省文聯の編集・創作練習生に採用された。1951年2月末のことである。当時河北省文聯の秘書長だった遠千里⁽²⁴⁾の招請を受けて、保定市提法司街にある文聯に迎えられたのである。省文聯の主任は胡蘇⁽²⁵⁾、秘書長は遠千里、編集部長は王思奇、副部長は柳溪、創作部長は張朴⁽²⁶⁾が務め、練習生は十数人であった。劉紹棠は文学組に配置されたが組長は編集副部長の柳溪だった。「憶華年」には比較的詳細に河北省文聯時代の思い出が書かれている。最年少の子供として年配の幹部から可愛がられたこと、同時に柳溪の大学時代の小説まで読んでいて皆を驚かせたことやいたずら小僧として仲間を困らせたことなど。河北省文聯が比較的こじんまりした組織であり、和気藹々とした雰囲気であったことが伝わってくる。資料室は二中の図書館より充実していたようで、

魯迅や孫犁、ショーロホフを読みふけた。中でも孫犁の小説からは学ぶべきものが多かったようで、「開始了第二個青年時代」では次のように称賛している。

「孫犁の作品を読んで、私は生活の美意識に目覚め、美学の世界が広がり、私の審美趣味は向上し、文学における美の重要さを痛感した。孫犁の作品は美そのものである。文章の美しさ、人物の美しさなど、孫犁の作品を読むと高度な美しさを享受できる。」

劉紹棠の孫犁発見は極めて重要な意味を持っている。この後、劉紹棠は孫犁を師と仰ぎ、孫犁との個人的関係を深めてゆくとともに、作品も、文章の美しさ、人物の美しさを追求して、ある面ではそれに成功していると考えられるからである。⁽²⁷⁾

1951年の夏、劉紹棠は保定を離れ、故郷の通県に帰った。河北省の文聯で練習生だったのはわずか半年である。理由は年齢が低すぎることだが、それはそもそも遠千里の誤解に始まる。遠千里は劉紹棠を華北省中部や南部の解放区の中学生のように年嵩がいていると思いをしていた。劉紹棠と初めて会って後悔し、劉紹棠に学校に戻りたければ戻ってもよいと言ったが、劉紹棠は戻らないと断言して練習生となった経緯があったのである。遠千里と劉紹棠の友情はその後も続き、劉紹棠は機会があるごとに遠千里を訪ねている。

練習生時代の作品は短篇小説9篇と散文1篇である。この時期の小説で出色の物に《蔡桂枝》がある。新民報に2月18日から3月2日にかけて発表されたもので、蔡桂枝という女性の解放を描いている。

桂枝は生まれ落ちたときから祖父母に嫌われ（新婚初夜にできた子は一家に災いをもたらすという迷信のために）、父親に嫌われ（長子が男でなく女であるという理由で）、美しく育つと父親の子ではないと村人

に噂され、祖母と父親が死んでからは、祖父にいじめぬかれる。母親は娘を可愛がるのだが、旧社会に育った人で祖父母に従順だし、村人の目を強く意識しすぎている。18歳になった桂枝は文字を学ぶ決心をし、隣の小学四年生の女の子に習い始める。やがて冬学（農閑期の識字教育）に出ることから婦女連合会の女性と知り合い、自立の道を歩み始める。最後は北京の工場の女工となり、実家を援助するようになって、祖父も自分を反省するところで物語は終わる。

蔡桂枝がたどる女性解放の生き方を通して、新社会が与えている可能性の素晴らしさを見事に描いた小説といってよいだろう。しかも、迷信に凝り固まった祖父母、村人の噂を真に受ける劣等感の強い父親、涙涙で全てを耐える母親等、旧社会を描く劉紹棠の筆は冴えている。その旧社会の中で覇気をもって成長してゆく桂枝にはある種の感動さえ覚える。

3. 高級中学生のころ

(1) 潞河中学のこと

故郷に帰った劉紹棠は通県の潞河中学に推薦入学で入った。教会学校としてスタートした潞河中学は名門中学である。劉紹棠はエッセイや小説の中で度々潞河中学を取り上げて説明している。最初に歴史を見てみよう。潞河中学の前身は1867年創立の八境神学院に遡る。アメリカの組合教会から派遣された姜戴徳が通州城内の北後街の教会に設けた学校である。教科は、聖書・中国語・英語で卒業生は宣教活動をした。1893年に潞河書院と改め、2年後に通州城の南へ移った。1900年義和団の運動でこの学校は焼かれてしまうが、辛丑条約に則り、潞河書院の校長は白銀2万両の賠償金と新城南門以西の広大な地域を割譲させた。1901年にアメリカの組合教会と長老教会とイギリス国教会の3教会が義和団の賠償金で潞河書院を大拡張し、教学棟・宿舍棟を建築し、運動場を拡張し、新式の教学設備を整えた。

今なお残る西洋風の建物，紅樓（本部）と人民樓（教員宿舎）はこの時建てられたものである。将来大学と中学を合わせ持つ高等学府とするための拡張で，名も協和書院と改められた。1912年に協和書院は華北協和大学に昇格した。

1917年に華北協和大学は北京城内に移り，匯文大学と合併し，1919年に燕京大学と名を改めた。中学部は現地にとどまり，私立潞河中学となった。

1926年北洋政府の教育部は法令を出し，外国人が投資し設立された学校でも校長は中国人でなければならないと決めた。そこで潞河中学では初めて中国人校長陳昌佑が赴任し，人格教育を校是とし聖書を教科から外すなど宗教色を薄めた。しかし，潞河中学はやはりアメリカ教会の経営する学校であり，官憲や軍閥の干渉も及びにくく，学生運動は比較的活発であった。辛亥革命の烈士蔡徳辰は協和書院の学生であり，共産党の支部が1927年通州で成立したのもここで，9.18事件以後の抗日運動も繰り広げられた。1941年，太平洋戦争が始まると，潞河中学は日本軍に接收され，河北省通県中学と改称された。1946年に再び私立潞河中学にもどり，1951年10月末朝鮮戦争の興奮の中で，私立潞河中学は河北省人民政府に接收管理されて，河北省通県中学（一中）と改まった。と同時に，男女共学となり，女子学生も募集することとなった。⁽²⁸⁾

劉紹棠が一時通学したのは日本軍が接收した河北省通県中学の附属小学校で，位置は中学の校地の北側にあったが，その後，北西に移動し，後南倉小学校と変わった。劉紹棠が潞河中学に在学したのは1951年秋から1954年夏までの間で，劉紹棠が入学してすぐに河北省人民政府に接收されたものと思われる。

(2) 高校生活

『通州文史』1988年第3期は潞河中学創立120周年特集号になっている。卒業生，在校生の回想が多数寄せられているが，共通に指摘していることは，学生自治の伝統とサークル活動の活発さである。

「潞河中学は学生自治を重視していた。学生のことにはできるかぎり学生自身にやらせ、学生の自治能力を育てた。この方針のもとで、学生会のような学生の組織が多数あった。体育では各種目の代表チームがあり、合唱団、読書会、年刊編集部から宿舎には村長までいた（宿舎の名称が蘭石村や菊隠村などと村名になっていた——筆者注）。学生は自分で食事を作り、食卓には食卓長までいた。」（「我在潞河中学的成長」高沂 1928—1934）

学生自治の伝統は、解放後も維持されたようである。建国初期の党建設や朝鮮戦争という緊張した時代背景とも相俟⁽²⁹⁾って、一層積極的な意味合いを持っていたと思われる。

劉紹棠は学生会の副主席と学生新聞〔紅樓新聞〕の責任者を務めている。この学生新聞は壁新聞で、第4面の文芸欄には、毎回、小説・詩歌・散文・映画評論を載せたという。記念集の校史簡介にはこう書かれている。

「学生が経営した《通紅編集部》は、作家の揺籃と称され、編集・取材・出版等は文学好きの学生に任されていた。作家劉紹棠、記者房樹民等はここを舞台に健筆をふるった。学校が出した『全面的に学生の想像力と才能を発展させよう』という要求は、学生達に、智・徳・体の面で十分な発展をさせ、国家のための各方面の人材を養成した。当時の通県一中は上昇気流にのり、青春を謳歌していた。」

劉紹棠は申し分のない環境の中で高校生活を送ったと思われるが、劉紹棠のエッセイを通して見えてくるものは創作活動であり、校内の生活は見えてこない。二中時代や保定時代のように劉紹棠の生活や教師・同級生・文聯の人々を描いたものはほとんどない。1950年代初期から勤めていた王昶副校長の話によると、国文教師余澄清や校長方田古は劉紹棠と関係が深かったという。劉紹棠の高級中学時代は創作活動と学習・諸活動に忙殺さ

れていたようである。

劉紹棠の小説が国語の教科書に採用されたり、学校内外で各種の社会活動をしたり、文芸界の諸活動によく参加したりして、劉紹棠は潞河中学の有名人だった。それだけに党組織の要求は厳しく、同級生同様学校の校則と全ての制度を遵守するだけではなく、模範的役割をも果たさなければならなかった。例えば、課外活動と衛生日は率先して汚い仕事や疲れる仕事を引き受け、冬の宿舎では入口や窓に面したベッドで寝て、何事も自分が損をして人に譲ることなど。一度劉紹棠は日曜日に帰宅しない数人の同級生を連れて校外の食堂で肉入りパンと肉入りうどんを奢ったことがある。それが党組織の知るところとなり、贅沢をしないで勤儉を重んじるよう厳しく批判されたという。（「珍貴的回憶」）

学習面での要求も厳しく、文科だけではなく理科系科目も重視して、優等生のレベルを求められた。優等生レベルとは、各科目が85点以上で、総平均は90点以上の成績をとることである。共産党の考えを自分のものとし、仕事や会議の一挙手一投足に至るまで党の原則を守り、党の方針・政策を実行し、しかも何事も事前に指示を求め、事後に報告を義務づけられていた。

潞河中学の模範的學生としてのみではなく、新民主主義青年団の模範人物としても、劉紹棠に寄せる党組織の期待は大きかったようである。そして、劉紹棠は党組織の期待に応じて十分な役割を果たしたように見受けられる。しかし、劉紹棠の入党を討論する支部大会は紛糾し、二度目の支部大会でやっと承認を得た。（この支部大会は黨員全員の参加と、全校教職員生徒の自主参加も認められた。この支部大会は潞河中学でもちょっとした事件だったようである。）劉紹棠が個人主義者であると批判する反対意見があったという⁽³⁰⁾。しかし、結果的には、劉紹棠本人も個人主義的であることを認めており、改善の余地もある、ということで入党が承認された⁽³¹⁾。'53年5月27日のことである。高級中学三年になると、前述した学生会の副主席、〔紅樓新聞〕の編集長を担当し、さらに新民主主義青年団支部書

記、志願輸血大隊の大隊長、校外では、専区の学生連合会、専区の抗米援朝分会の仕事を分担し、河北省や北京の会議にも出席した。劉紹棠は1954年夏、潞河中学を卒業し、北京大学中文系に入るが、第二の劉紹棠を目指す学生達は「春荀文学研究会」を作り、月刊《春荀》を出版して文学熱はなお続いたという。（「“潞河”——我文学之路的起跑線」 趙日昇 『通州文史』1988年第3期）

学生生活の一端として触れておかねばならないのは、後に劉紹棠の妻となる曾彩美のことである。彼女は劉紹棠より一歳年長の、帰国華僑である。15歳の時、ラングーン（現在のヤンゴン）で秘密黨員となり、1951年に単身帰国して、16歳で潞河中学の高級中学一年生になった。建国当初は帰国華僑の子弟が多く、潞河中学は、彼等の受け入れ校になっていた。一年に百人以上受け入れたこともあり、帰国学生専用の食堂まで用意していたという。⁽³²⁾劉紹棠が彼女に恋心を抱いたのは、1952年の夏であると、《我的創作生涯》で述べている。曾彩美はおとなしい学生で、中学を卒業して北京師範大学中文系に入った。

(3) 創作活動

以下、劉紹棠の創作活動にかかわる部分を取り上げてゆこう。

「15歳の夏、故郷の儒林村で、私は意識的又は無意識のうちに自分の2年にわたる習作の得失を総括し、先輩作家の創作経験を研究し、仲間の創作面での優劣長短を考え始めていた。そして私は今後の創作方向——農民と故郷を書く——を決めた。私は魯迅や孫犁やショーロホフの小説からある啓示を得た。それは創作面で必ず個人の特性を持ち、独特の芸術風格を形成するよう努めることである。」（「我的第一本書」）

この夏書かれた短篇小説に《完秋》と《暑伏》がある。共に農村の集団化を描いた作品だが、若者の明るさを描いて屈託がない。劉紹棠はこの二

篇を天津日報の副刊〔文芸周刊〕の編集長である孫犁のもとへ送った。《完秋》は9月16日に、《暑伏》は10月14日に掲載された。この二篇の原稿料は61円で劉紹棠と妹の一学期分の食費が賄えたという。文聯の資料室で読みふけた孫犁への傾倒と農民文学を目標に据えた決意とから、劉紹棠は孫犁との接触を求め、孫犁を師と仰ぐ第一歩を踏み出したといえよう。編集長孫犁は劉紹棠のような少年に対しても民主的な態度をとった。作品を修正したほうがよいと判断した時でも、原稿を送り返さないで、まず手紙を書いて、修正するかどうか尋ねた。劉紹棠が、修正はしないと返事をしても、孫犁は作品が一定のレベルに達していれば掲載した。しかし、後に、孫犁は雑談や書信で劉紹棠の作品を取り上げ、作品の不備を指摘して劉紹棠に以前の不足を考えさせたという。孫犁は劉紹棠を育てただけでなく、名伯楽として、従維熙や韓映山をも育てている。劉紹棠は1957年春、反右派闘争で批判されるまでの間に相当数の作品を天津日報に発表した。⁽³³⁾

12月に劉紹棠は小説《紅花》を中国青年報に投稿した。当時、中国青年報の副刊・編集長であり文芸部主任であった柳青はこの小説を称賛した。⁽³⁴⁾中国青年報の要請を受けた周立波の賛同を得て、《紅花》は1952年1月1日の中国青年報に発表された。編者按が付き、第4面を全て使用して。柳青は劉紹棠と二度会談し、文学は愚人の仕事だから、わりと読者の注意を引くのだという言葉を残した。これ以後、中国青年報とのかかわりから、新民主主義青年団中央の直接の養成を受けることになる。「我怎樣写小説《紅花》的」には、この小説を書いた動機が説明されている。

「私の故郷では、若い女性はとても深刻な思想問題を抱えている。結婚前には仕事を大胆に進んでするが、結婚すると消極的になり、夫が遠方で働いているともう門を出ようとしない。」

活動的な女性も、家庭に入ると封建的な男女観にとらわれて、消極的・保守的になってしまう。劉紹棠はそのような女性を何人も目にし、それを

問題としてとらえたわけである。

《紅花》はどのような小説かということ——村の婦女生産隊が堤防警備(夜警)の任務を与えられるが、村人に悪い噂(「女だけで堤防で徹夜するなんて危なくて!」)を立てられるのが心配で任務につけない。隊長の家庭では許婚者の男性が遠方で働いているのを気にして、隊長の足を引っ張る。しかし、最後には隊長の英雄的行為でスパイを撃退して任務を果たすという内容である。

この小説では隊長の積極性と彼女の英雄的行為で堤防が救われ、隊長が表彰されることで、許婚者は名誉を、家族は反省を迫られることになる。女性隊長の英雄的行為のみによって封建的な男女観が変化するとは思えないが、積極的なこの女性はやはり魅力ある人物として読者に受け取られたように思われる。

1952年の夏から秋にかけて、劉紹棠は三編の小説を発表した。《青枝緑葉》は夏休みに書かれたもので、農村の互助組をめぐる集団化の利益を描いた作品である。中国青年報(9月)に発表されたが、この作品は翌年の高級中学二年の国語の教科書(統一本)に採用された。劉紹棠の代表作とみなされ、後に出版された小説集のタイトルともなっている。《擺渡口》と《大青驢子》は天津日報の副刊に発表された。後、人民文学の1952年10月号と1953年4月号に転載される。当時の人民文学の編集長邵荃麟の目にとまったものである。⁽³⁵⁾

《擺渡口》は、渡し舟を手伝う少年のすがすがしさと淡い恋を描いた佳作であり、読後感もさわやかである。中学時代の作品の中ではまともにもよく、最高の出来栄ではないかと思われる。農村の匂いと少年の健康さが作品に生氣を与えている。《大青驢子》は、互助組でラバの世話をする老人が公私のけじめをきちんとして公有財産を守ろうとする話である。

劉紹棠の作品で成功しているものは、新政策の体現者が同時に封建道徳の信奉者でもある場合で、新政策と封建道徳が矛盾衝突すると書けない、又は失敗作ということになる。とりわけ、集団化が農村の封建道徳と激し

く衝突し、矛盾・摩擦が大きくなった1953年に作品がないのは理由のないことではないだろう。

1953年の作品は、6月に短篇小説集『青枝緑葉』⁽³⁶⁾(上海新文芸出版社)が出版され、創作に《布谷鳥歌唱的季節》1篇があるのみである。この作品は中国作家協会主編の『優秀短篇小説選』(1956年)に収められた。高級中学三年後期の作品に《山楂村的歌声》《航空信》《十字路口》がある。《山楂村的歌声》は人民文学1954年7月号に発表され、後、中国青年出版社主編の『青年作家優秀短篇小説選』に収録された。

(4) 中国青年報と作家の援助

劉紹棠と中国青年報とのかかわりは《紅花》を紹介したところで述べた。当時文芸部主任・副刊主編の柳青が激賞し、周立波の目を通してから1952年の元旦に発表された。《青枝緑葉》はさらに一步進んで、発表までに沙汀、周立波、嚴文井、康濯の意見を聞いている。中国青年報は1951年4月27日に創刊された新民主主義青年団の機関紙である。当時はまだ数日間隔で出版され、日刊になるのは1956年をまたねばならない。中国青年報は人材の養成を重視した。次の引用は投稿者の中から人材が発見された例として、劉紹棠と房樹民の名を挙げている。

「皆さんは劉紹棠をご存知でしょう。1951年、彼は通県で高級中学に進学したとき、新聞社に《紅花》という名の原稿を寄せ、1952年には又《青枝緑葉》の原稿を寄せた。新聞社では彼を通信員に採用し、指導者は彼と会い、助言をした。(中略)又、房樹民が1954年高級中学に進学したとき、青年報に《陳老師》という小説を書いた。発表後、彼を通信員として迎えた。」(「回憶中国青年報的創建和成長」張黎群 新聞研究資料総第八輯)

潞河中学の《通紅編輯部》は作家の揺籃と称され、劉紹棠と房樹民の名

が挙げられていたが、ともに中国青年報の通信員として採用され、同紙のスタッフに養成を受けていたのである。

「私は中国青年報とまるで家族のような親密な関係を持った。彼らは創作面だけでなく、思想面でも实际的・具体的且つ無私の援助をしてくれ、たくさんの老作家を紹介してくれ、党の政策文件を読むよう指導してくれ、私がお郷に行って生活体験をしたり旅行したりするのを援助してくれた。」（「生長在陽光普照的沃土上」）

劉紹棠と接触したのは柳青の後任である呉一鑑⁽³⁷⁾である。劉紹棠の創作面から、入党、結婚面の世話も引き受けたようである。

創作面での援助は後で述べることにして、中国青年報の指導者胡耀邦との会見とお郷での生活体験について述べよう。胡耀邦は1952年9月、新民主主義青年団中央委員会第一書記の座につき、14年間このポストにいた。胡耀邦は中国青年報等の出版に十分な時間を割いたことを張黎群の回想は書いている。胡は青年出版物を魅力あるものにするため、二種類のグループ——影響力を持つ革命家、著名な学者や専門家と青年通信員や抜擢された先進的・有能な青年達——に執筆を求めたという⁽³⁸⁾。劉紹棠は中国青年報の通信員として重視されていたように思われる。1953年2月に胡は劉紹棠と会見し、批判を謙虚に受け入れること、生活実践に裏打ちされた作品を書くこと、古今東西の良書を読み、一年に1200万字は読破することを劉紹棠に求めたということが「生長在陽光普照的沃土上」に感激とともに記されている。胡は、中国青年報を通じて劉紹棠に大きな影響力を持ったように思われる。劉紹棠が後に反右派で批判される下地を作ったといえるかも知れないが、それは又別稿で触れる。

1952年からほぼ毎年劉紹棠は他郷へ生活体験に行くが、これは全て中国青年報からの派遣である。1952年の年末は東北地方瀋陽で生活体験し、1953年は河北省深県段家佐村で生活体験⁽³⁶⁾をしている。

続いて創作面での援助に触れよう。

《青枝緑葉》が発表される前に、劉紹棠は中国青年報の紹介で康濯を訪ねている。康濯は劉紹棠の大部分の小説を読んでいて、農民のプチブル根性が描けていないと批判した。以後、彼は劉紹棠の指導教師としての立場に置かれたようである。⁽⁴⁰⁾康濯は、劉紹棠が「深く生活に入る」よう、劉紹棠の作品が「万万歳で太平を装う」ことのないよう戒めたという。康濯は自伝でこの時期のことを次のように書いている。

「この時期も作品を書いたが、長年農村工作に従事した経歴と、建国前後わりと早くから農業の互助合作と社会主義改造に関心と注意を払っていたので、作品にもこの面の生活が反映している。1952年以降の数年間、私は続けて農業生産合作社の創立・拡大・整理に参加してきた。」
 (『中国当代作家自伝』第一輯)

劉紹棠の作品が「万万歳で太平を装って」いるという批判は、先に作品の紹介で挙げた問題点——経済的成功によって、徒弟制度が崩壊し、女性解放が成功するという安易さ——を突いたものと思われる。

1953年、沙汀と嚴文井は劉紹棠の失敗作の原因とそれにかかわる数点の疑問に答えている。この年、劉紹棠の作品にはほとんど見るべきものがない。その原因として、集団所有で紛糾する農村を如何に描くかに苦悩したことと、当時流行した公式的概念的意見（例えば、党支部書記は如何に描くか、風景描写は不要とかいうような）に翻弄されて、失敗作が続いたことを挙げている。沙汀は劉紹棠の言い訳を遮り、「そんな考えは馬鹿げている」「自分に一体どのくらいの元手があるか、自分で分かっているはずだ！」とストレートに批判し、劉紹棠は赤面して冷汗のかきどおしだったという。二人は短篇小説集『青枝緑葉』の長所を取り上げ、極左的意見に耳を貸さないよう話した。又、沙汀はチャーホフの小説を薦めた。別の機会に、沙汀は劉紹棠の小説のディテールが真に迫っていないと注文を付

け、古くさい常套句を多用する劉紹棠の文章を問題にしている。劉紹棠の思想面から言葉遣いの面まで、魯迅、茅盾、チェーホフの小説に学ぶよう説いた。沙汀は厳しい教師として劉紹棠を指導したようである。康濯や沙汀の他にも馮雪峰⁽⁴²⁾や邵荃麟の指導も受けたが、ここでは省く。中国青年報のスタッフ、とりわけ呉一鑑から物心両面の援助を受け、文学講習所の康濯や作家協会の創作委員会副主任であった沙汀、邵荃麟の指導を受けたことを確認しておく。

おわりに

中学時代の生活で、触れておかねばならない二、三の点がある。家族の生活については、劉紹棠や妹の劉紹虹から直接聞いた以外のことは資料がないので分からない。1950年に四弟劉紹家（フホト発電所の労働者）が生まれ、1953年に五弟劉紹声（中国国際旅行社会計）が生まれている。

劉紹棠は幼少年時代から講談好き、芝居好きであったと書いたが、やはりこの時期も変わりはなく、「聴京劇和写小説」には彼の見聞した芝居のことが詳しく語られている。日曜日には天橋の芝居小屋まで足繁く通っている。劉紹棠の小説の文体は、講談の語り口と似ていると思うのだが、これも感想でしかない。

新民報・天津日報・中国青年報の副刊は文学少年の投稿の場であり、同時に編集者が作家の卵を見出す場でもあった。北京文芸創作研究会の経営した业余文学芸術学校文学系は作家の卵の養成機関としての役割を果たした。中国青年報の援助——政治学習と他郷での生活体験——や老作家の指導——周立波・康濯・沙汀等の諸作家は農民文学とりわけ農村の社会主義的改造（集団化）に関する作品もあり、豊富な経験も持っていた——から見えてくることは、農村の社会主義的改造を積極的に推し進める青年男女を描くことを劉紹棠に期待していた点である。具体的に言うと、《紅花》のような小説を期待していたのではないだろうか。劉紹棠は建国初期の情熱と団員・党員の義務から、喜んでその期待に応えようとしたかに見える。

注

- (1) 『郷土与創作』(1982年吉林人民出版社)
『我与郷土文学』(1984年春風文芸出版社)
『一個農家子弟的創作道路』(1985年四川人民出版社)
『我的創作生涯』(1988年中原農民出版社)
- (2) 北京市男子第二中学は俗称で、当時五男二女と言われ、男子中学が5校、女子中学が2校あった。
- (3) 「北京崇実中学沿革」羅遇唐 『教育季刊』第七卷第1期 1931年3月。
- (4) 当時はなお北京市以外からも受験できた。
- (5) 劉紹棠は、解放前、公費学生として、一か月面粉30斤を支給されていた。
- (6) 1949年1月1日に成立。中国人民解放軍平津前線司令部の指導下に置かれ、軍事管制時期の権力機関であった。委員会主任は葉劍英。軍事管制委員会の下部に文化接管委員会が設けられ、さらにその下部に教育部が設けられて、実質的にはこれが二中を接管したことになる。
- (7) 当代作家、本名は王適生。1935年5月21日生まれ。1950年、最初の小説《看書》を発表。1951年、北京大衆文芸創作研究会に入り、北京の新民報・天津日報〔文芸周刊〕に小説を発表する。
- (8) 1933年9月1日生まれ。作家・シナリオライター。北京業余芸術学校文学系で学習。
- (9) 当代作家。1933年9月16日北京生まれ。「1946年に北平市立第二中学に入り、前後して、劉紹棠、從維熙、張天民などとともに学び、同級生と文学社団を作り、新詩と散文を書き始めた」(『中国文学家辞典』現代第四分冊)とある。
- (10) 当代劇作家。原名黃庭愈。1926年2月24日生まれ。
- (11) 1928年に燕京大学を卒業して、二中の校長及び北平国立研究員出版部秘書を務め、1931年から北平戯曲専科学校(後の中華戯曲専科学校)を経営した。
- (12) 「從劉紹棠到韓曉征」尹世霖。尹世霖は1953年に高級中学に入り、卒業後二中の国文教師を勤めた。
- (13) 数学三傑の他の二人は師大附中の傅種孫(幾何に優れ、後、北京師範大学の副校長)と四中の馬文元(代数に優れ、後、武漢測量学院の教授)である。
- (14) 合唱団の四部合唱は有名で、中山公園の音楽堂で公演をした。詩の朗読会、演劇のサークル活動、スポーツ活動等のことが、「北京二中校慶紀念冊」に出ている。
- (15) 北京市文聯が成立する前に、老舎と趙樹理は王亞平、苗培時、辛大明などと共同して大衆文芸創作研究会を始め、戯曲創作に従事する名人を団結させて戯曲改革を進める中堅を育てた。(「老舎在北京市文聯」王松声『新文学史料』1986年第2期)

- (16) 1950年末に成立した盲芸人講習所などが統一されて、北京业余文学芸術学校に発展した。
- (17) 4月1日に接收された中学は、他に師範大学男女附属中学、北京師範学校の三校である。
- (18) 許立群は新民主主義青年団の指導者の一人。峻青は作家で、当時は中南人民放送局宣伝課長。
- (19) 1950年4月に劉紹棠は入団し、1953年5月に入党している。新民主主義青年団の最低年齢は14歳である。
- (20) 「解放時的北京新聞界」王迪（『新聞研究資料』総29輯）には1949年「2月28日時点で、なお出版されていた旧新聞は世界日報と新民報しかなかった。（中略）世界日報は一カ月少々で我々に接收された。（中略）1952年5月から9月末にかけて北京晩報準備会は新民報の設備を購入し、同時にこの新聞を受け継いだ。北京市最後の私営になる新聞はこうして終えた。」とある。
- (21) 「從劉紹棠到韓曉征」尹世霖。
- (22) 「從劉紹棠到韓曉征」尹世霖。1作目、2作目は未見。
- (23) 当時、劉紹棠の実家は困窮していた。「北運河の寵児」に書いたように、土地改革と身分認定で土地が減少し、父親の商売はうまくいかず、兄弟の誕生が相次いだ。
- (24) 1915.8～1968.6.22現代詩人。解放後、河北日報副刊組長。河北省文聯編集部長兼秘書長。河北省文聯副主席、河北省文化局副局長。
- (25) 1915年生まれ。劇作家で原名謝相箴。解放後、中共河北省委宣传部文芸部長、河北省文学芸術界連合会主任。
- (26) 1922年生まれ。当代作家。解放後、河北省文聯創作部長。『創作之家』『蜜蜂』『河北文学』編集委員。
- (27) 孫犁は解放区の大学で教鞭をとったり、通信社、新聞社、文聯等で仕事をしていて関係から、河北省文聯での声望も高かったようである。又、文学青年のための文芸理論《文芸学習》や小説《荷花淀》を通して、文学青年への影響力もあった。解放後、多くの文学青年が天津日報の副刊〔文芸周刊〕へ投稿したのも理由のないことではない。
- (28) 潞河中学の近くに姉妹校富育中学があった。これは女子中学で、劉紹棠の妹劉紹虹はここで学んだ。富育中学は通県二中に、女子師範は通県三中に改まった。
- (29) 潞河中学の記念集には朝鮮戦争で戦死した三名の烈士が紹介されている。
- (30) 個人主義者という批判は、劉紹棠が大衆活動に模範的でなく、小説ばかり書いていたことを指すのではないかと、王昶副校長は説明してくれた。
- (31) 潞河中学校校長陶玉森、副校長王昶氏談。

- (32) 潞河中学校長陶玉森，副校長王昶氏談。
- (33) 天津日報の副刊〔文芸周刊〕は1949年3月24日に創刊された。天津日報創刊は1月18日だが，孫犁は以後「労働者業余作者の養成と指導に努力する」と述べている。北京・天津在住の文学好きの青少年は〔文芸周刊〕に投稿した後，作家として大成した者が多い。劉紹棠の友人王黙風や房樹民も又その一人である。
- (34) 柳青は1951年4月から1952年5月まで中国青年報副刊の編集長を務めた。1950年から青年団中央に居住。
- (35) 邵荃麟は1953年から中国作家協会副主席兼党組書記創作委員会第一副主任の職にある。
- (36) 小説集『青枝緑葉』の初版は挿し絵入りで《紅花》《青枝緑葉》《擺渡口》《大青驢子》の四篇を載せた。二版は挿し絵をとり，新たに組み直して《修水庫》を加えた。三版，四版まで出，合計で62,000冊になる。
- (37) 女性で1935年入党。抗日戦争期は解放日報副刊の編集員。解放戦争期はハルビン市の衛生局長，建国以降は中国青年芸術劇院創作室の指導者で，当時は中国青年報の文芸室主任・副刊編集長だった。1957年反右派となり，1961年病死した。
- (38) 『胡耀邦伝略』 楊中美 新華出版社。
- (39) 生活体験とはこの場合集団化に揺れる農村に住んで農民達の生活を深く知り，社会主義社会の進むべき道を認識することにある。
- (40) 康濯は当時文学講習所の副秘書長として青年作家の世話をしていた。文学講習所の前身は1951年1月2日成立の中央文学研究所。所長は丁玲。康濯生平年表（康濯研究資料）の1952年夏の項に以下の文がある。「中国青年報の委託を受け，数人の老作家とともに劉紹棠《青枝緑葉》初稿の修正を討論し，劉紹棠を知る。」
- (41) 沙汀は1952年冬から中国作家協会創作委員会副主任を務め，1953年1月に四川省文聯の主席に，8月に『人民文学』の編集委員となっている。
- (42) 馮雪峰は1951年3月から人民文学出版社社長兼編集長。1952年2月から『文芸報』編集長を兼ねる。1953年中国作家協会副主席。1957年反右派となる。